

大分に眠るドイツ海軍兵への墓参・3

— 研究活動が紡いだ地域との絆 「日独友好の桜」とともに —

2020年11月13日、在京ドイツ大使館武官カーステン・キーゼヴェッター大佐（Karsten Kiesewetter）（以下、武官と表記）により初めて実施された大分県桜ヶ丘聖地での第一次世界大戦時のドイツ捕虜病死者¹への慰霊祭から約一年、2回目となる慰霊祭が、10月14日（木）に実施された²。

式においては、武官及び大分県代表者による挨拶に続き、武官夫妻による献花が実施され、陸自西部方面音楽隊 深松嘉王 2等陸曹のトランペットによるドイツ及び日本の追悼曲の奏樂は、式典をより荘厳なものとした。



図1：献花する武官夫妻³

昨年の慰霊祭においては、献花に引き続き、武官と大分県代表者による植樹が実施され、日独交流が、武官のスピーチの中の「木を植えることは未来を信じること」の言葉に象徴されるようにその進展が期待されることとなったが、この際に植樹された桜は、後に「日独友好の桜」と命名され、この行事に端を発した大分を拠点とした交流と同時に成長を続けている。本稿においては、この1年間の日独及び地域交流の深まりを筆者も含めた研究活動面から整理し、紹介したい。

¹ 大分での病死者は、リヒャルト・クライン（Richard Klein）、ユリウス・パウル・キーゼヴェッター（Julius-Paul Kiesewetter）の2名であり、後者が武官の曾祖父の弟にあたる。

² 慰霊祭の実施に至る細部経緯は次を参照、安松みゆき「戦争の記憶を平和につなげる大分での出来事—第一次世界大戦時のドイツ兵俘虜の墓—」『別府大学地域社会研究』第32号、2021年3月25日、23-29頁、
<https://www.beppu-u.ac.jp/research/mt-uploads/%E5%88%A5%E5%BA%9C%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E5%9C%B0%E5%9F%9F%E7%A4%BE%E4%BC%9A%E7%A0%94%E7%A9%B632%E5%8F%B7.pdf>

³ 自衛隊大分地方協力本部撮影

「日独友好の桜」と共に育つ絆

日独友好の桜は、2021年3月、早くも花を咲かせた。この桜の由来を説明する板が大分県により設置され、3月26日、武官夫妻の訪問に合わせて披露された。



図2：日独友好の桜⁴

この頃から地元においては、捕虜収容所をテーマとして歴史を学び直そうとする機運が高まり、その成果の一部は、慰霊祭に合わせて大分県立美術館及び別府大学で実施された写真展「ドイツ兵が見た大分の人々と風景の写真展～大分県桜ヶ丘聖地から始まる日独交流～」(企画・監修：別府大学 安松みゆき教授)に反映されている。

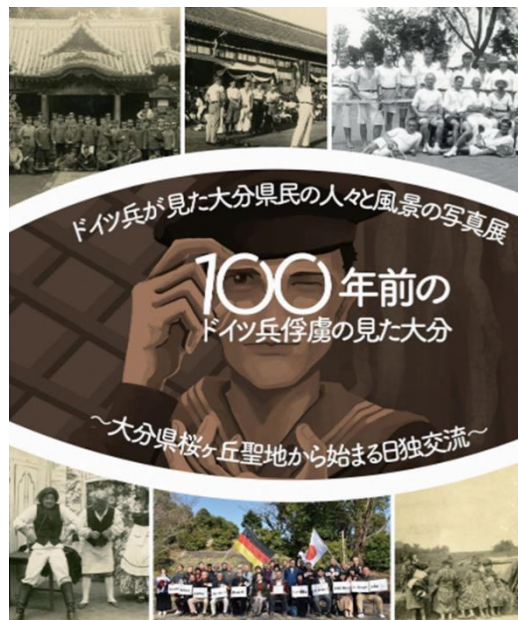


図3：写真展案内⁵

⁴ ドイツ大使館提供

⁵ 大分県及び別府大学作成

この写真展において展示された写真は、当時の陸軍省俘虜情報局が作成した『大正三四年戦役俘虜写真帖⁶』に加え、鳴門市ドイツ館及び日本ドイツ研究所が所蔵する捕虜が個人的に整理していたアルバムから選定されており、日独双方の視点から構成されているという点で、捕虜収容所における生活を知る上で有意義なものとなった。

また、捕虜の生活のみならず、カメラが貴重品であった当時の大分市内の風景や生活様式を知ることのできる史料としての側面もあり、1918年に発生した水害の際の写真など防災学上の価値が見出されつつある写真も含まれている。

より捕虜収容所の施設に的を絞った研究としては、郷土史研究家の森本卓哉氏（医師、予備2等陸佐）が、母校である捕虜収容所のあった大分市立金池小学校に保管されていた平面図などの史料、自身の所蔵する大分の郷土絵葉書、大分県立図書館等の所蔵資料をもとに校舎や大分の風景の変遷をまとめることで、同校敷地内での捕虜収容所の設置場所を特定し、この成果は慰霊祭後に行われた武官の金池小学校を含む史跡研修の説明資料として活用された⁷。



図4：森本氏により特定された収容所跡地⁸（第4校舎跡）

筆者は、こうした研究や武官の史跡研修を軍事史的知見から補佐するとともに、7月15日には、別府大学文学部の講座「美術史概論」において、「戦時下、パンデミック下におけるドイツ人捕虜収容所での芸術活動」としてオンライン講義を実施した。これらは、研究によって得

⁶ 俘虜情報局 編『大正三四年戦役俘虜写真帖』俘虜情報局、大正7年、
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/966639>。

⁷ 森本卓哉「金池小学校の風景今昔 ―ドイツ人が見た百年前の大分―」『おおいの歴史』みえ記念病院、2021年10月13日、
<https://www.miekinen.com/kanaike-elem-school/>。

⁸ 同上。

られた知見が防衛交流及び地域との交流に寄与した事例として、新たな研究成果の活用先を切り拓くこととなり、本校としても意義深いものであった。

日独交流の今後 日独交流 160 周年の節目

1861年1月に日普修好通商条約の締結により開かれた日独の国交は、本年160周年を迎え、国内各地で様々な行事などが行われている。海上自衛隊にあっても、インド太平洋への関心を増すドイツ海軍艦艇の派遣に伴う各種交流行事や共同訓練などによる日独交流が深化中である。

他方、両国は共にコロナ禍にあってこの節目となる年を迎えたが、捕虜収容所が存在した約100年前にあっても、大分収容所の閉鎖（1918年8月）後に習志野へ移送されたドイツ人捕虜約210名のうち9名が、1918年インフルエンザ（いわゆるスペイン風邪）により命を落としている⁹。10月24日（日）、筆者は、武官とともに千葉県日独協会の主催により習志野市で行われた慰霊祭において、献花を行った。

このように当時の歴史に学ぶ意義が増している中であって、研究活動に基づく交流の進捗は重要であり、大分に眠る二人のドイツ兵を起点とした研究を地域とも連携しつつ、一層深めていく。

（海上自衛隊幹部学校 戦史統率研究室 本名 龍児）

（本コラムに示す見解は、海上自衛隊幹部学校における研究の一環として執筆者個人が発表したものであり、防衛省・海上自衛隊の見解を表すものではありません。）

⁹ 習志野での収容生活及び感染拡大の状況は、千葉県日独協会の翻訳による『エーリッヒ・カウルの日記』に詳述されている。

エーリッヒ・カウル『エーリッヒ・カウルの日記』宗宮好和監訳、千葉県日独協会、2020年、http://jdg-chiba.com/pdf/ErichKaulsTagebuch_Jp.pdf.